



Title	言語外的条件と言語行動の相関に関する言語社会心理学的研究
Author(s)	Ostheider, Teja
Citation	大阪大学, 2003, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44123
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	オストハイダー テーヤ OSTHEIDER, TEJA
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 1 7 4 6 3 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 15 年 3 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科日本学専攻
学 位 論 文 名	言語外的条件と言語行動の相関に関する言語社会心理学的研究
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 真田 信治 (副査) 教 授 土岐 哲 助教授 渋谷 勝己

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、話し手と聞き手との関係における、聞き手の外見や属性などの「言語外的条件」と、それに対する話し手の意識に焦点を当て、その意識と言語行動の相関に関する諸側面を明らかにすることを目的としたものである。まず言語行動に関する従来のモデルを再検討し、新たなモデルを提案した。そして、そのモデルに基づき、フィールドワークによって得られたデータを分析した。一つは外国人に対する母語話者の言語行動が対象であり、もう一つは車椅子使用者に対する、いわゆる健常者の言語行動が対象である。

第 1 章では、言語行動を構成・左右する要素に関する従来のモデルを再検討し、言語行動における言語外的条件および心理的要因に関する定義と位置づけを中心に本論文の理論的枠組みとする新しい概念の導入を検討した。そのコアの一つがそれら条件をめぐる話し手の主観的意識の分析を可能とする「心理的フィルター」である。

この概念に沿って、第 2 章では、外国人が有する言語外的条件（または外国人の母語）によって日本語母語話者の言語行動が異なることを調査によって確認し、日本人における対外国人言語行動の多様性の一端を明らかにした。また、言語外的条件と言語行動の相関を示す一現象としての対外国人言語行動における母語話者による過剰適応の存在を確認し、その要因、対象と性質に関するいくつかの側面を明らかにした。さらに、過剰適応を引き起こしうるいくつかの（社会）心理的要因を指摘し、母語話者の心理的フィルターの内容と機能について考察した。その結果を踏まえ、対外国人言語行動における母語話者の調整の要因として、外国人の言語能力の有無と程度を重視している Ferguson (1981) の「フォリナー・トーク」に関する定義に、言語外的条件と言語行動の相関（言語外的条件による外国人の言語能力に関する母語話者の想定）という要因を加え、従来の定義を拡大した。

そして、第 3 章では、対身体障害者言語行動についての分析を試みた。具体的に調査したのは車椅子使用者に対する、健常者の言語行動のありようである。調査に協力したインフォーマントは、切断、脊髄損傷、頸椎損傷などのために車椅子を使用しているが、言語内的条件（言語運用能力など）に関しては健常者と異なる特徴がまったくない人々である。にもかかわらず、その車椅子使用者に対する健常者の言語行動は、車椅子使用という言語外的条件によって大きく左右されることが明らかになった。この結果から、対外国人言語行動と同様に対身体障害者言語行動という研究領域においても言語外的条件に対する心理的フィルターをめぐる検討が重要な課題である、とする。

論文審査の結果の要旨

われわれが毎日さまざまな人と行うコミュニケーションはきわめて動的なものである。それは多様な要素によって構成され、それらの要因によってわれわれは行動を左右される。それらの要素として、伝達内容自体、使用される言語変種やコード、また参加者が有する言語能力などのような、言語にかかわる「言語内的条件」が挙げられるが、場面や時間、参加者の動機や目的、参加者の年齢・外見や社会的属性などの「言語外的条件」も話し手の言語行動に重要な影響を及ぼす要素として考慮しなければならない。

本論文は、話し手と聞き手の関係における、聞き手が有する言語外的条件および話し手の意識に焦点を当てて、それらの要素と話し手の実際の言語行動との相関について、いくつかの側面を明確にした。題名に「言語社会心理学的」と謳ったことからもうかがえるように、話し手が聞き手にいづく「思い込み」「先入観」といった心理学・社会学が扱うものまでに研究対象を広げて、実際の言語行動を分析した点は評価できよう。先行の研究においては、会話が進行して以降の話し手と聞き手の言語的対応の様相だけが分析されることが多かったからである。

ただし、本論文においても問題点がないわけではない。たとえば、日本人の「思いやり」「相手への配慮」といったものの内側にある、一種の「偏見」の生成プロセスにまで踏み込むような考察があっても良かったのではなかろうか。また、記述の重複なども目立つが、ともかくフィールドワークで実態の一部をデータとして具体的に掲げ、「心理的フィルター」なる概念を新しく提示したことは評価される。しかし実は本当に重要なのはそのフィルターなるものの形成の過程であり、それこそが追究すべきテーマであった。

しかしながら、これらの点は本論文の価値を損なうものではけっしてなく、研究の継続によって補えるはずのものである。特に、「フォリナー・トーク」に関する従来の Ferguson の定義を修正した点は百尺竿頭一步を進めたものといえる。よって、本論文を博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。